

わんりい

185号

2013/7/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



「チベットカム地方の遊牧民の暮らし」(2011年8月中旬撮影・四川省甘孜チベット族自治州理塘県・標高4000m)
標高4000mを越えた川西高寒草原には、そこでテントを張り遊牧生活をして暮らしているチベットの遊牧民の人たちがいる。テントの外は高山植物が一面に咲き乱れている。テントに招かれて入ると、暖かいバター茶を用意してくれた。邪心のない笑顔も忘れられない。
(撮影者 烏里烏沙 / チベットカム山岳研究会 NPO法人 チベット高原初等教育・建設基金会 ゲーサンメド・理事長)

北京の地下鉄とバスについてお話したので、もう一つの交通手段であるタクシーについてもお話したいと思います。そう思ってから、偶々、新聞記事や北京の人から、北京のタクシーの実情と、改革の動きがあることを見聞きしました。今、北京のタクシーは捕まえるのが難しく、やっと捕まえても行き先によって乗車拒否に遭うことが多いのだそうです。其の原因には、タクシーの数が増えない、運転手さんの労働条件が良くない等タクシー業界の構造上の問題が大きく関わっています。それで、行政が問題の解決に動き出し、構造改革と共に、料金体系の見直しも予定されているのだそうです。

しかし、私がお話ししようと思ったのは、そんな難しい問題ではありません。もっとも、北京のタクシーのお話をする時は、当然、その料金の安さが話題になりますから、其の点では無関係とは言えませんが、現行の料金は、2006年に改正されて以来据置きなのだそうです。実際は、同じ区間を乗ると、昔より大分高いと言う印象を持ちますが、制度上は変わっていないのだそうです。

北京の2006年は、北京オリンピックの準備が本格的に始まった頃です。20世紀の終り頃に北京を訪れた方たちは、「北京のタクシーは屋根が食パンのように膨らんで黄色い車だった」と懐かしそうにおっしゃいます。私が住み始めた2000年ごろには、この手のタクシーは姿を消して、私自身は、ほんの1回か2回、目にした程度です。その代わりに走っていたのは、赤い小型車で、車の後ろには「夏利」と書いてありました。これは日本のダイハツ工業の「シャレード」と言う車で、一時期、タクシーは皆この「赤い夏利」でした。何時この車に変わったのか分かりませんが、2003、4年頃には、かなり草臥れていて、シートが破れていたり、窓を開閉するハンドルが無くなっていたり、中には、客が乗り降りする側のドアの取っ手が取れてしまって、お客は窓から手を入れて中のハンドルを動かしてドアを開け、乗り込まなければならないものもありました。

それが、2006年頃、殆ど一斉に、くすんだ黄色を基調としたタクシーが走り出しました。基調の黄

色は一緒ですが、窓ガラスから下には会社、或いは組合によって違う色を配しています。そしてこの車は、韓国の現代自動車の車でした。「赤い夏利」は、ほんの時々見かけるだけになり、本当に肩身が狭そうに走っていました。又、この頃には、フォルクスワーゲンやアウディーのタクシーも見かけました。この時に料金も改正されたのでしょうか。確かに、「最近タクシーが高くなって」と話題にしたことを思い出します。でも、其の料金が、日本と比べて段違いに安いのです。

北京へ行って間もない頃、私は、バスに乗って道路を見ていると、助手席に女の人を乗せたタクシーが非常に多いことに気が付きました。初めてそれに気が付いた時は、タクシーの運転手さんが家族サービスで、奥さんをドライブに誘ったのだらうと思いました。まだ自家用車を余り見かけない頃でしたから、「最高の家族サービスだ」と感心しました。ところがその数があまりに多いので、不思議に思い出した頃、友人とタクシーに乗る機会があって、其の謎が解けました。北京の人達は、先ずタクシーの助手席に乗り込みます。私がバスから見ていた助手席の女性は、皆、タクシーのお客さんだったのです。

助手席と言えば、「赤い夏利」の頃のタクシーは、運転席と助手席の間が嚴重に仕切られていて、料金は、仕切りのアクリル板の間隙からお金を差し入れ、お釣りを受け取っていました。運転席と後部座席の間も仕切られていて、運転席は丁度、車の中の檻という感じでした。それが、新しい車になって、仕切りのない車が多くなりました。車内も少し広くなり、窓も自動で開けられるようになりました。但し、ドアはまだ自動開閉できないので、乗客は降りたら、ドアを強く締めなくてはなりません。

昔のタクシーは、車が古くなっただけではなく、土埃にまみれていました。それが今では、定期的に洗車をしているようで、埃だらけのタクシーは見かけなくなりました。乗客は、清潔で乗り心地の良いタクシーに乗れるようになったのですから、今度は運転手さんの待遇改善も進めなければならないでしょう。でも、余り高くないように希望します。

盗人に追いかける

私の調べた諺・慣用句 21

三澤 統

「盗人に追いかける」という諺があります。会社などで給料だけは一人前にもらって、ろくな働きをしない社員は、口の悪い上司から「この給料泥棒が…、もっとまじめに仕事をやってくれよ！」などと言われてしまうかもしれません。あげくにその社員が定年となって、そこそこの退職金をもらって会社を去るとしたら、会社の心情としては“これではまるで 盗人に追いかけるだけ”というところではないでしょうか。

“盗人に追いかける”に類する故事が中国にもあります。三国時代に劉備に孫権がしてやられたお話です。

まず、意味を辞書から調べてみましょう。

▲三省堂 現代国語辞典：

「盗人に追いかける→泥棒に追いかける お金をとった泥棒に、更に金をやるような、馬鹿気たこと」

▲中日辞典 小学館：

「賂了夫人又折兵 péi le fū rén yòu zhé bīng 計略が失敗してかえって損失を招いたとえ。盗人に追いかける。三国時代、呉の君主孫権は妹をめあわすと言って劉備を呉におびきよせて殺そうとしたが、結果は劉備がまんまと夫人を得て無事に蜀へ帰ったという故事から」



この成語の由来は「三国演義」¹⁾の“周郎妙計安天下，賂了夫人又折兵”の部分です。(周瑜は天下を安定させようと妙計をたてたが、夫人をだまし取られ、その上兵までも失ってしまった)。

公元208年、蜀の劉備は荊州を占領し、勢力は日まじに強大になりました。呉の孫権は劉備に対して、南郡²⁾の地の返還を要求していましたが、未だ返還が適えられていない状況下にありました。

どうしても南郡を取り返したい孫権は大将の周瑜と計略を立て、孫権の妹(以下孫夫人)を嫁にやる振りをして、劉備を呉国まで呼び寄せ、すきを見て人質として取り押さえ、そして南郡を取り返そうとしました。劉備が呉国に向かって出発する折に諸葛亮が大将の趙雲にある計略を授け、現地に入ったらその計略を行

なうように指示しました。

劉備たちが呉国に到着した後、趙雲は諸葛亮から聞かされた計略にしたがって、町中に、劉備が孫権の妹を妻に娶るといふ偽りの情報を振れてまわりました。ところが真相を知らされていなかった呉国の太后(孫権の母親)はそのことを知って、初めは驚いて孫権をひどく叱りましたが、いろいろ思案した末、彼女(太后)が甘露寺で劉備に会ってみて、もし気に入ったら娘を政略結婚として劉備の嫁にやり、気に入らなかつたら、すぐに劉備を殺してしまおうと考えました。

ところが会って見ると、太后は劉備のことを気に入ってしまったので、彼らを結婚させても良いと勝手に考えました。しかし孫権は劉備を騙すつもりが本当に妹を嫁にやることになりそうなので、太后の勝手に大変立腹しました。そこで周瑜がまた計略をたて、今度は劉備を呉国に留めて、接待攻めで骨抜きにしていまい、その機に乗じて南郡を取り返そうとしました。

劉備はすっかり楽しんで故郷に帰ることを忘れてしまったのですが、実は諸葛亮は、そうなることも読んでいたので、「曹操が攻めて来た」とうそを言って、劉備をいそいで帰らせることにしました。劉備は曹操が攻めて来たと聞くと周章狼狽して慌てましたが、その最中に孫権の妹を連れて呉国を離れましたが、その途中柴桑の地で周瑜の追手に行く手を阻まれました。

そこで趙雲はまた策略をたて、孫夫人を前面に出して、夫人の口から兵に帰るように言わせました。それでも周瑜は船まで追ってきましたので、劉備たちは慌ただしく船から岸に上がりました。結局周瑜は深追いしすぎて却って劉備たちに打ち負かされ多くの兵が犠牲になりました。

こうして孫権は劉備に妹を取られてしまったばかりでなく、兵までも少なからず失ってしまいました。

話の中では太后の動きが少し見えにくいのですが、他の資料から察すると、彼女は当初蚊帳の外に置かれていた為、真相が分からず、その間に劉備一派が彼女に近づき味方側に取り込んだふしがあります。

〈注記〉

1) 三国演義(三国志演義)：『三国志演義』(さんごくしえんぎ)は、中国の明代に書かれた、後漢末・三国時代を舞台とする時代小説・通俗歴史小説である。四大奇書の一つに数えられる。(ウィキペディアより)

2) 南郡：“郡”は古代行政区域のひとつ。

張委は、自分たちが荒らした庭が元通りになっているのを見て、呆気に取られてしまいました。しばらくして我に返るといろいろ考え始めました。

「どうのことだろう。この爺(じい)は本当にすごい! もしかしたら、この庭には、本当に花の神様が宿っているかもしれない」

「いや、どうすればこの魅力溢れる庭を俺のものにできるのだろうか」

「花を叩き落され、踏み潰された植物をただ一晩で元通りにする力があるというのはきっとただものじゃない。何という魔力を持ってる爺さんだ」

「そうだ、そうだ、秋先は妖魔爺(じい)だ。妖魔爺(じい)に違いない!」

張委は慌てた様子で下人や仲間たちを引き連れて、秋先の庭を後にしました。

皆は不思議に思って張委に訊きました。

「どうして帰るんですか? あの庭はもういらないんですか?」

実はその頃、朝廷に反抗する人々が妖怪を偽ったり、神がかりになったふりをしたりして、あちこちでいろいろ怪しい事件を起こしては朝廷への不満を晴らしたりしていました。朝廷はそれらの怪しい動きがひとまとまりになって大きな力になることを恐れ、事件が起こる都度、事件に関わった人物に懸賞を掛けて捕え、事態の收拾を図っていました。実は張委は、このような時代背景をもとにある考えを思いついたのです。庭を奪うなら今は絶好なチャンスかもしれません。

張委は下人や仲間たちに言いました。

「最近、幽霊や、妖怪を偽って朝廷を騒がす人が増えているというじゃないか。秋先もその一人かもしれないと思わないか? 秋先の庭で起こった不思議なできごとを役所に報告したら、秋先はすぐ捕まえられるに違いない。その上、賞金ももらえるだろう。おまけに秋先がいなくなったら、庭は俺のものになるはずだ。考えてみれば本当にこの上ない良いチャンスだぞ。よし、早く役所に行こう」

張委は役所に行き、秋先の庭での不思議な出来事を一つ一つ役所の長官に報告しました。もちろん秋先との争い事には触れませんでした。

役所の長官は、張委が語る信じ難い話の内容にびっくりしました。近頃、妖怪や、幽霊などが現れたという噂をよく聞いていましたが、まさか自分が管轄する地域で同様のことが起るとは思ってもいませんでした。そして、直ちに秋先を捕えました。

「おまえの庭に、幽霊が現れたと聞いたが本当か?」

「いいえ、長官さま、幽霊なんか、全く見たことなどありません」

「そんなことはないだろう。おまえの庭で怪しいことが起こったのを多数の人が見たっていうじゃないか。それはどういうことだい?」

「いや、わたしがひどい目にあって途方に暮れていた時知らない女性が現れて助けてくれたのです」

「では、その女性はどこに住んでる? 何という名前か?」

「いや、それはわかりません」

「おまえの話が本当だと誰が信じるのかい? そういふ女性なんか本当はいないんじゃないか? 全てお前が自分ひとりでやったことなんじゃないかね。いったい、おまえの正体は何なんだ! 妖怪か、幽霊か?」

「とんでもないことです。わたしは勿論人間です。町の人びとに訊いてみて下さればすぐ分かることです」

「どうしても本当のことを言わないつもりなのか?」

よし、それなら拷問にかけて本当のことを話してもらおうことになるがよいか!」

秋先がいくら抗弁しても役所の長官は耳を貸さず、下役に棒を持って来させ、秋先を叩くように命じました。下役が太い棒を手にしてまさに秋先のお尻を叩こうという時、突然、長官の頭に立ってられないほどの激痛が走りました。

長官は仕事を続けることができなくなり、拷問にかけられるのを明日に延ばして秋先を牢屋に入れておくことにしました。すると不思議なことに頭の痛みが消えました。

実は長官は以前にも裁判の結果で冤罪をかぶせた時、頭に原因不明の痛みが起こった経験がありました。長官は「もしかしたら秋先も無実なのだろうか？」と考え始めました。そしてこの事件はよく調べてみないといけないと長官は思いました。

一方、秋先は牢屋に入れられた怒りや悲しみに加えて、悔しくてなりません。その夜、床にひとり寂しく横たわった秋先は天に向かって祈りました。「神様よ、どうしてこんな事になったのか教えてください。私を憐れむお気持ちがあったら救ってください。お願いです！」

とその時、目の前に美しい女性が突然現れました。見れば先日家の庭に現れた、まさにその女性ではありませんか！

「大変なご迷惑をかけました。このような事になってしまって申し訳なく思っております。実は私は天界に住む花神です。人の世で花が咲いたりしぼんだりするのを司るのです。秋先さまが植物をご自分の命のように大切にされていらっしゃる姿に感動し、何かあればお助けしようと思っております。秋先さまはきっとご無事で放免され、悪人には悪事の報いが必要です。どうぞご安心ください」

秋先が慌ててお礼を言おうとすると意識が戻り、夢でした。

ところで、張委は秋先が牢屋に入れられたと聞くともう秋先の庭が自分のものになったと嬉しく思い、下人や仲間たちを連れて庭にやってきました。しかし、庭に入って見てびっくり仰天しました。張委の目の前の、庭の木々はあちこちで倒され、花々はいたるところで散乱して、昨日、自分たちが乱暴をし踏みにじったままの光景でした。

いったいどういうことなのでしょう？ 秋先は本当に妖怪なのでしょう？ 張委たちはがっかりして庭に座り込んで、どうすればよいか対策を相談しようとする、突然風が吹き始め、花々や葉を巻きあげてぐるぐる回り始めました。そして巻き上げられた花々や葉は沢山の小人のような女の子たちになりました。一方風の渦はみるみるうちに大きくなり、見れば渦の中に若い女性の姿があります。この光景を目撃した張委達はあっけにとられて目を

大きく見開き口も開けたままの状態でも声も出ませんでした。と、その時、

「みなさん、私たちは秋先の愛を受けてこの庭で何十年も住んできました。しかしながらつい2、3日前、私たちの目の前にいるこの心のない連中たちに庭を壊され、植物は虐められ、秋先も牢屋に入れられてしまいました。その上、この庭を奪おうとしています。皆さん、どうすればいいのでしょうか？」

「勿論追い払おうよ、この悪人たちを！」

小さな少女たちは幅広い袖をはためかせて舞い上がると、張委たちを囲んでぐるぐる回り始めました。空が暗くなり、身体に刺さるような冷気が立ち込めて立ってられないほどの強い風が吹き始めました。

張委たちは怖ろしくなり、大騒ぎしながら庭から逃げようとあちこち転げ回ったり、這い回ったりして、やっとの事で庭から逃げ出しましたが、気が付くと張委の姿がどこにも見えませんでした。

翌日、役所の長官のところに、町の人びとの嘆願書が届きました。嘆願書には、「秋先は決して妖怪などではなく、とても慈悲心の深い人だ、また悪人の張委がその庭を奪おうと根拠のないことを告げて秋先を陥れようとしたものだ」というような内容が書かれていました。

長官はそれを読むと、村中を歩き回って調査し、ことの真相がはっきりしました。

「冤罪にせず済んでよかったな」と安堵して、秋先を放免し、虚偽の報告をした張委を追及しようと張委を捜しましたが、張委はもう話が出来なくなっていました。

張委はいったいどうなったのでしょうか？

実は、強風が収まった後、下人たちが一生懸命張委を捜した結果、外壁の下にある池に張委の死体を見つけました。風に巻き込まれて池に落ち水死したに違いないと思われます。

秋先は無事に自分の家に戻ると、一層心を込めて植物を育てましたので秋先の庭は、一年中青々とした美しい緑で覆われ、色とりどりの綺麗な花々で彩られるようになりました。そして、村の人びとが何時でも秋先の庭を鑑賞できるように庭の入口を大きく開いておきました。(終わり)

「五月病」その後

前回、五月病になったと、この欄で書いた。その後、のことである。

あの原稿を書いた後、10年前に五月病になったことを思い返した。引き金は、1つ下の新入社員だった。当時、社会人2年目の私は、小さい出版社で営業職として、がんばっていた。営業成績もよかった。やりがいを感じていた2年目に、新入社員が3人入ってきた。彼らはいい大学を出て、編集者志望で、若者はみなそうだが、やる気と自信はあるが、実力はこれから、という男の子たちだった。そして、彼らは、自分よりもよい基本給で契約をした。さらに、そのなかの1人が、営業職への配属を打診され、「営業をやるくらいなら辞める」と言い放った。それら、一連のことが、一気に自分を五月病へ引き込んだ。彼らが入社して4ヵ月後、会社を辞めた。

今の自分なら、どうするだろうか、と考えた。おそらく、極力冷静に社長に打診するだろう。1年間の実績を鑑み、基本給を新入社員よりも高く契約してほしいと。当時の自分は、慰留する社長に、なにひとつ退職理由が説明できなかった。妙なプライドがあったのと、退職の理由を自己分析しきれていなかったのが敗因だ。

今回の五月病も、引き金があるはずだと、冷静に考えてみた。心あたりはひとつあった。異動前の部署では認められていたことが、今の部署では認められていなかった。ささやかことだが、モチベーションを下げるには充分なことだった。思い当たった翌日、その案件について認めてほしいと上司に打診した。これは自分一人の問題ではない、非正規社員にこの件が認められていないのは、当部署全体の課題であると、冷静に話した。結果、その案件は認められることになった。不思議と、五月病も治った。

10年前の自分に言えることがあるなら、退職を決めて、たまった有給休暇を使って中国旅行に行ったのは、なかなかいいチョイスだった。けれど、もっと別の選択肢も探してみてもよかったのでは、ということだ。ただ、あのときに一つの選択肢を選んだからこそ、別の選択肢があるということを知ったのかもしれない

(真中智子)



以前に「瀋陽市」で、この街は過去に5度も6度も名称が変わっていると書いたが、「南京市」もその変化の回数では引けを取らない。列挙すると、建業、建康、金陵、江寧、天京・・・という具合だ。南京という名が付いたのは15世紀初めである。それは次の経緯による。

1368年明王朝ができて初めて江南の地・金陵に都を置いた。それまでの全国を統一した政権の都と言えば、長安、洛陽、開封、大都(北京)などいずれも北方にあった。しかし漢民族が大陸の南方を次第に開拓していき、経済の中心が南に拡大したことにより政治の中心も初めて南に移動したといわれている。

そうした中、明王朝の第2代皇帝で不世出の英傑との評価の高い永楽帝が実権を握ると、そのころ元王朝の後裔のモンゴル族の勢力が依然として強かったことから、そのおさへの必要から北京に都を移したのである。それまでの北平を北京と名称を変え、あわせてもとの都の金陵を南京として名称が確定した。

南京については、もう一つ前段に書いておくべきことがある。それは全国統一政権と地方政権を合わせた王朝の数は、長安(西安)に匹敵することである。古い順に並べると、まず三国時代の孫権の呉、それから東晋、ついで南朝の宋、齊、梁、陳と続く。ここまでの六つの王朝(222年～589年)で六朝文化が栄えた。その後時代は下って、十国時代の南唐(937年～975年)、明、太平天国(1851年～1864年)、南京国民政府となる。

王朝と呼ぶのに多少疑問符が付くものもあるが、とにかく一時的にせよ政治の中心となった時期はこれだけあったということである。南唐時代は短かったがこの時代は唐代の貴族文化がまた開花し栄えた。最後の皇帝となった李煜は、政治は見るべきものはないが文人としては才能をみせ、音曲に合わせて歌えるよう「詞」を考えだし、統一王朝の宋の時代に花開いた。(「宋词」は前号で陸游の詞を掲載したのでご参照ください)

少し長くなったが、私が言いたかったのは南京市

に対するイメージは、「豊かな文化・学問と芸術の香りがする街」ということである。私のイメージを形成してくれた漢詩を幾つか紹介しながら古の南京に思いを馳せたい。

南京市内には「秦淮河」という河川が流れている。大小の湖の間を縫うようにして最後は長江に合流する。この河川は全長100キロメートル余りで中国においては小さな河川であろうが、南京市の中心部を北に向かって流れ「南京の母なる河」と呼ばれている。後述する有名な「夫子廟」はこの川沿いにある。秦淮河は一部しか見ていないのでよくわからないが、文人墨客に好まれる景観と雰囲気のあるところらしく漢詩や宋词に詠われているのである。私の好きな杜牧(803年～853年)が詠った詩を紹介したい。

泊秦淮

煙籠寒水月籠沙
夜泊秦淮近酒家
商女不知亡国恨
隔江猶唱后庭花

(注・秦淮は秦淮河のこと)

もう一つ六朝時代の建康(南京)の雰囲気伝える詩に「子夜歌」がある。当時、呉歌と呼ばれる民謡が江南地方中心に歌われたが、子夜歌もその一種で「子夜」という歌妓が歌ったそうだ。その歌は哀切を帯び、一世を風靡したと伝えられる。子夜歌は現代に伝わる詩は四十数首ある(何れも題名はない)が、そのうちの一つを紹介して首都建康の庶民を偲びたい。

宿昔不梳頭
糸髮披兩肩
婉伸郎膝上
何處不可憐

この詩の意味を故人となられたが尊敬する松下緑さん(漢詩の戯訳という新しいジャンルを示された)の戯訳で紹介したい。〈ユウベノママノミダレ髪。肩ニカカルヲ結イモセズ。アナタノ膝ニシナダレテ。「ワタシ可愛イ女デショ」〉

これを哀切を帯びて歌ったというのであるが、昔

も今も変わらないということか。南朝はある意味でいい時代であったと思われる。

南京と言えば、孫文や中山陵の方が有名であろうが、長い歴史の中では一時期のことである。中山陵はさすがに立派であるが、私には紫金山のふもとや秦淮河沿いにあった城壁に圧倒された。西安をはじめ、城壁が街を取り囲むようにして昔のように残っている都市には行ったことがなかったので、初めて見たこの城壁はすばらしいと思った。写真では何度も見たが実際に目にすると感激するものである。多くの都市で、戦乱あるいは道路を造るためいとも簡単に城壁を取り壊しているが、まことに惜しむべきことではある。中国人の多くは5千年の歴史を誇るが、一方でなぜ歴史の遺産を簡単に葬り去るのか理解できない。

先に杜牧の詩を紹介したが、彼の詩に昔の南京を詠んだ有名な詩がある。それは、

江南春

千里鶯啼緑映紅
水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺
多少樓台煙雨中

である。六朝文化の栄えた前述した南朝は、仏教文化が隆盛を誇り、寺院の数は南京だけで5百以上あったと、ものの本に書いてある。

この詩は読めばおよその内容はわかるが、石川忠久氏は次のようにこの詩を解説しておられる。

〈見渡す限り広々とつらなる平野のあちらからもこちらからも鶯の声が聞こえ、木々の緑が花の紅と映じあっている。水辺の村や山沿いの村の酒屋の目印の旗が春風になびいている。一方、古都金陵には南朝以来の寺院がたくさん立ち並び、その楼台が春雨の中に煙っている〉

“江南地方”については「紹興市」でふれたが、この地方の当時の情景が目浮かぶようである。なおこの漢詩は昨年3月の漢詩の会で植田先生から詳しく解説して頂いた。

さて車から降りてどこをどう歩いたのかわからないが、「夫子廟」というところに出た。たしか川沿いを歩いていたと記憶するが、川幅が急に広くなっ



夫子廟風景 その①



夫子廟風景 その②

ている周辺に中国独特の反り返った屋根瓦の建物がたくさん現れた。マッチ箱をタテにしたような近代的なビル群に辟易している私にとっては、目の覚めるような光景であった。それらが川面に映えて私の旅情をくすぐった。そして南京に対して抱いていたイメージに近い風景にとっても満足した。

私は南京に初めて行く人にはまずこの場所を薦めたい。ところで「夫子」とはもともと儒学者への尊称らしい。そして「夫子廟」は一般的に孔子廟を指すとのことである。また紛らわしいがこのあたりの地名にも使われている。すこし歩くと孔子廟の前に出た。中に入ったが、中心的な建物である大成殿は中国各地にある孔子廟の建物と同じである。多くの観光客でいっぱいであったので少し離れているところから孔子像に向かって手を合わせた。孔子廟のあるあたりは道幅もゆったりしてレストランや土産物のお店が多い。散策していてとても楽しい。



夫子廟の一角にある大成殿

そのうち中国式の鳥居のようなモニュメントがあり、上の方には「江南貢院」と扁額が掛かっているところにでた。友人に聞くと、昔の科挙の試験場のあったところだそうだ。明朝を建国した朱元璋が都を南京としてから、科挙の試験場も国家レベルの規模に造り替えたのである。江南貢院は歴史的建造物であり、現在は科挙制度の博物館となっている。

当時はこの場所に天下の秀才が集まったのだ。受験者は全員狭い個室をあてがわれ、ここで寝起きをし与えられた問題に対して何日もかかって答案を作成した。ある問題が終わると一度部屋から出てまた別の日に新しい問題に取り組んだ。個室は最盛期には2万余室もあったという。平屋として間口を仮に1メートルとして計算しても2万メートル、つまり20キロメートルと途方もない規模である。不正も起きないように厳格に運営されていたという。科挙は、試験の内容が近年に至り時代の趨勢と乖離してきたとはいえ、世界一の想像を絶する国家試験であった。

ここを後にして、南京のお土産物を物色しようということになった。何が有名なのか全然分からないのであちこち歩き回り、とある路地に入ってみた。浅草の仲見世の感じの商店街である。

そこで友人に勧められたのが「雨花石」である。店先にいくつも置いてあったので手に取るととにかく「美しい」の一言。それもそのはず、瑪瑙の一種だそうで美しい色彩と縦縞模様が何とも言えない。色は、青、緑、茶、グレーとさまざままで透明な質感がある。孫娘が綺麗な石集めに熱を入れていたので早速買い求めた。バラ売りもあれば、箱に綺麗

に並べられた商品もある。この「雨花石」は美しいネーミングで南京のイメージにぴったりだ、と思っていたら南京市の南に「雨花台」という地があって、そこで産出するのでこの名が付いたと教えられた。

「南京市」の稿の最後に、詩仙李白(701年～762年)が金陵(南京)を懐古した詩を紹介したい。

登金陵鳳皇台

鳳皇台上鳳皇遊 鳳去台空江自流
吳宮花草埋幽徑 晋代衣冠成古丘
三山半落青天外 二水中分白鷺洲
總為浮雲能蔽日 長安不見使人愁

〈注・①鳳皇台/都・金陵の西南にある山の上に築いた台 ②吳宮/三国時代、金陵を首都とした吳の宮殿 ③花草/宮殿の美女のたとえ ④晋代/金陵を都とした東晋王朝(317年～420年)のこと ⑤古丘/古びた塚 ⑥三山/金陵の西南にある山 ⑦二水/金陵市内に流れ込む秦淮河は、その手前二つに分かれ一つは城内に入り、もう一つは城外を流れる。その二つの流れを二水と言ったもの ⑧白鷺洲/秦淮河の二流が挟んでいる中洲 ⑨人/ここでは李白自身のこと〉

李白は金陵には二度おとずれているそうだ。この詩からも秦淮河が文人墨客に如何に愛されていたかがわかる。私もいつの日か南京をまた訊ねたい。

(終)



【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられてます。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。

又‘わんりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

ハネト初体験

鄧さん、頑張る・日本探検記

4

鄧
レン
ヨウ

私の最新体験をご紹介します
たいと思います。

耳を劈くほどの太鼓の響き、「ラッセラ、ラッセラ・・・」と大きな掛け声、ハネトたちの大乱舞、夜空を燃やす巨大な武者灯籠、町中がまるで籠が躍動しているようでした。これこそ8月6日夜間運行の青森ねぶた祭りでした。

7月の初めに、県庁からJET青年のねぶた祭り参加の案内が届いたので、ねぶた

当日を首を長くして待っていました。まず集合場所の駅に着くと、いつもの青森駅と違って相当賑やかでした。せかせか

している旅行者らしい人たち、駅内で悠々と演じている三味線の奏者、チラシを配っている礼儀正しい若い女性たち、一変した駅の風景でした。

午後三時半頃に参加者全員が揃い、県庁に案内され、まず経験のある交流員が手取り足取りでハネトの正装を着せてくれて、お祭り

らしくなりました。しかし、そのままのいつもの革靴が目立ち、どうも似合わないと感じました。

再集合までまだ一時間あまりあったので、近くの町を見物しました。ある一軒の店の前に長い列が出来ていて、これは何だろうと不思議に思っ

て近づいて尋ねたら、「お祭り用の衣装を貸してくれる。」と言われました。「お祭り用の靴と靴下はありますか?」と私が聞くと、店員が「ありますよ、草履と足



ネブタ祭参加の鄧さん



「西遊記・火焰山の戦い」の山車。中央に座って、太鼓を叩いているのが鄧さん。

袋があります。」と違う呼び名で教えてくれました。手作りの草履と真っ白の足袋を手に入れましたが、どう履くのか戸惑っている時、周りに正装したばかりのハネト姿の青年が何人か立ち並んでいました。そして私が困っていることを知った一人が手伝ってくれました。中国の雷鋒(中国の昔の有名な兵隊)に会ったような気がして、感動しました。

薄暗くなってから、スタート地点の県庁前に集まり待機しました。始まりの号砲の後、ねぶたに灯りが点され、太鼓の音が響き、「ラッセラ、ラッセラ・・・」の掛け声にあわせ、皆が跳ね始めました。私も真似て跳ねました。これがハネトということでしょうね。

事前にシゴキにたくさん付けていた鈴を取って観衆に投げたら、受け取った相手が凄く喜びました。話によるとその鈴を手にした人は幸せになれるそうです。途中、一部の観客も中に入って共に跳ねました。気持ちが高ぶって、我を忘れるほど盛り上がりました。それで全身汗でびしょ濡れになりました。

翌日、今度は昼間運行のねぶたを見学しました。雲一つない青空で、日差しがいつもより強く感じられました。それにもかかわらず、お囃子も、ハネトも皆、懸命に参加していました。その熱心さに感動しました。歩道に座り込んでじっと見ていたら、全部で約二十台のねぶたが出陣しました。その中には「風神演義」、「鍾馗」、「孫悟空 閻魔庁を騒がす」、「托塔天王 晁盖」など中国文化のものが数多くありました。因にミスねぶた

も見ましたよ。

百聞は一見にしかず、日本で初めてのお祭りは一言で言えば素晴らしかったです。このように伝統文化が巧みに現代文化にとけ込んでいるのが凄くよいと思います。(本文も注も原文のまま)

「鄧さん頑張る・日本探検記」は、2004年から2006年の2年間、青森県六戸町の国際交流員として国際友好活動にかかわった、中国山西省太原市に住む一中国人・鄧仁有さんの日本体験です。

中国の笑い話 X (「365夜笑話」より)

第27話：和尚が餅を食べる

ある寺に、1人の肥った和尚と3人の小僧が住んでいた。この和尚は、もういい年なのに、食いしん坊で、けちん坊だった。法事のあった家から餅を貰って来ると、全部独りで食べてしまった。里から帰ってくると何時も、3人の小僧を早く寝かせて、独りでゆっくりと、貰って来た餅を食べるのだった。

ある日、和尚が里へ下りて行った時、3人の小僧たちは、額を寄せ合って相談した。

「和尚さんはケチだねえ。あんなに沢山の餅を独りで食べてしまうなんて！」

「我々も、何か方法を考えなくちゃ。」

暫くして、彼らはいい方法を思いついた。

和尚が帰ってくると、3人は和尚を取り囲んで一斉に話し出した。

「和尚様、我々、何時も同じ名前では呼ばれるのは面白くないので、名前を変えたいと思います」

と言った。和尚は少しお腹が空いていたので、小僧たちとの話し合いを早く済ませて、早く餅を食べたいと思った。

「お前たちは、何と呼ばれたいのかね？」

はじめの小僧が言った。

「私は、“フー”と呼ばれたいと思います」

次の小僧は、

「私は、“パタ”と呼ばれたいと思います」

3人目の小僧は、「私は、“うまい”と呼ばれたいと思います」

和尚は、早く餅を食べたい一心で皆承知して、早く寝るように言いつけた。

やっと独りになった和尚は、施主から貰った餅を焼いて、食べようとして、餅に灰が付いているのを見つけて、フーフーと吹き飛ばした。すると“フー”と名を変えた小僧が顔を出し、「和尚様、お呼びですか?」と聞いた。餅を見られた和尚は、仕方なくその餅を小僧に与えた。

2度目は気をつけて焼き、手で叩くとパタパタと言う音がした。すると“パタ”と言う名の小僧が顔を出し、「和尚様、何か御用ですか?」と聞いた。今

度も、和尚は仕方なく、焼けた餅を小僧に与えた。

3度目は、更に気をつけて焼き、吹かず、叩かず、やっと一口かじって、思わず「うまい!」と言うと、「うまい」という名の小僧が顔を出したので、和尚は仕方なく、その食べかけの餅を小僧に与えた。

それが、今日貰ってきた最後の餅だった。

第28話：無料のお菓子

日本の新左衛門が子供の頃、住んでいた村にある兄弟が開いたお菓子店があった。この兄弟は仲が悪くお互いを信用していなかった。ある日兄弟は大声で喧嘩を始めた。

「この大馬鹿野郎!もう我慢できない!お前なんか殺してやる!!」

「やれるものならやってみろ。人殺し!人殺し!」

兄は包丁を持ち出すと、弟を追回した。その時、新左衛門が、つかつかと店に入って来て、お菓子を外に出しながら大声で叫んだ。

「さあ皆さん、お菓子を食べてください。全部只ですよ。皆さん、お金は要りません。好きなものを食べてください」

それを聞いて、喧嘩していた兄弟もビックリして叫んだ。

「お前は誰に頼まれて、そんなことをしているんだ?」

「でも、お兄さんは弟さんを殺すんでしょ? そしたらお兄さんも死刑になるから、この店は誰もいなくなってしまう。そうなればお菓子はカビが生えて食べられなくなってしまうから、今のうちに皆に食べて貰ってしまう方がいいでしょう? さあ皆さん、どんどん食べてください!」

と言った。それを見た兄弟は、口々に、

「ああ、どうか待ってください。そんなことをされたら店がやって行けない!」

「私達はもう決して喧嘩をしません。どうぞ菓子を持ち出すのはやめてください」

と言いました。その後、この兄弟は喧嘩をしなくなりました。

(翻訳：有為楠君代)

台湾登山ツアー体験④ 一番長い日

佐々木 健之

◆嘉明湖避難小屋まで

未だ真っ暗の中、皆ヘッドランプを付け、ガイドを先頭に立てて一列縦隊で出発。小雨模様なので誰もが上下の雨具を着け、雨が上がることを期待して歩く。私ら夫婦だけが傘をさして歩いた。

傘をさしての山歩きは、日本の山でいつもやっている。風があると傘があおられて困難だが、微風程度なら蒸れなくてよい。登山杖を持つと、傘はさせない。

歩き始めは一方的な登りが続き、闇夜の山道をヘッドランプで照らして黙々と歩く。標高3000mを越えて高山病を気遣うためか、歩みはゆったりだ。

急勾配をがんばり通し、尾根に上がると風が出てきたので傘はたたんだ。いつしか雨が止み、夜明けが近くなってうす明るくなった。そして向陽山の南側を回り込む道あたりで日の出を迎えた。

この山行での最低気温は、せいぜい0℃くらいだろうと想定し、手袋は化繊の軍手を持ってきた。尾根道はけっこう寒かったので、その軍手をはめた。ガイドの「大柱」が私を見て、そんなもので寒さ対策は大丈夫かと、仕草で示した。心配してくれるのは有り難いことだ。続けて私のサンバイザーを指さし、「そんなものでは耳が寒いぞ」と身振り語でいった。その時はお節介でうるさいなあと思ったが、他国から来たお客さんが寒かろうと思い、おもんばかってくれたのだ。

湿度が高いせいか、だいたい色の曙光があたりを包む。地平線に近い太陽の方向は、はるか太平洋の方まで雲海が続く。雲海の雲とは別に立ち昇っていく雲

が幾つもあり、天気は落ち着きがない。安定した好天は望めなかった。

登山隊の台湾人は、装備が新しく綺麗な人が多かった。日本人7人は、使い込んで少しくたびれたようなリックと服装であった。台湾の人はほとんどが厚手の手袋をして、耳当ての付いた防寒ウェアをしっかりと着込み、例外なく1本または2本の登山杖を使っていた。対する日本人は誰も杖は使わなかった。私も登山杖は一応考えたが、荷物になってしまなので、なくても何とかかなと思った。Fさんは杖をリックに着けていたが、最後まで使わなかった。

尾根筋を離れて、山腹を巻く道に入ってしばらく歩くと「嘉明湖避難小屋」に到着した。時刻は朝の6時半。避難小屋と名が付いてはいたが、そこはかなり広く、他のパーティーの人や、宿泊している人もいた。ここで少し長い休みをとって、菓子などを食べる。連れ合いはあいかわらず食欲がなく、頭痛と吐き気で不調であった。高山病らしい。食べられるのは日本から持ってきた、レトルトの蒸したサツマイモ。それと台湾で買い求めたバナナやポンカンであった。油ものや、加工食品は体が受け付けない。登山隊全体の歩行速度が遅いので、不調なりに歩いていた。ポンカンは1個15元の大粒の高級品を4個持ってきた。これはとびきり旨く値段の価値はあった。

休憩が済むと、ふたたび一列縦隊となり、まずは向陽山北峰(3462m)に向かう。森林限界より上部は背の低い笹原となっていた。



オレンジ色の日の出。妖しげだ。



下山のパーティとすれ違い。

◆三叉山、嘉明湖

7時半頃に向陽北峰近くの平坦地に着いた。休憩。「北峰」に登るには縦走路から外れて、寄り道をしなければならぬため、我々は寄らなかった。

このころが1日を通じて最も天気が良かった。部分的に青空がひろがり、展望を邪魔する雲の隙間から台湾脊梁山脈の一部が見えた。

これから進む、尾根道は雲で隠れている。やはり、天気は回復基調ではなく、下り坂だ。

次の目標は2キロ先の三叉山(3496m)だ。出発すると直ぐにガスの中に入った。視界のない山歩きは、足もとの周り数メートルがボンヤリ見えるだけで、日本の山も台湾の山も変わりはない。

1時間ほどで三叉山と嘉明湖へ分かれる鞍部に着いた。ここまですでに5時間以上歩いたので、まだ比較的元気な人と、疲労の激しい人との格差ができていた。そこで山叉山経由で嘉明湖へ行く健脚組と、三叉山を割愛して嘉明湖へ直行する、安直組とにパーティーを分けた。

日本人7人は全員三叉山登頂組に入った。連れ合いは調子が悪そうであったが、登らないと損を考えると考えたか、健脚組に入った。台湾人で健脚組に入ったのは数人のみで、半数以上は安直組になった。このことは、日本人が強くて、台湾人は弱いというのではなく、日常生活の差が出たのだろう。日本人組は月に数回山に入るが、台湾組は若い人が多く働き盛りだ。実生活の仕事が忙しく、山ばかりに行っていられないのだろう。そうなれば年齢に関係なく体力に差が出る。

風は吹いていたがさほど強くはなく、歩行に困難はなかった。霧雨のようなガスに包まれて歩くと、山腹の斜面を直線的に登るようになった。三叉山は3000mを超える山なのでもっと鋭角的な山登りと思っていたが、霧雨でボンヤリと霞んでいる片斜面をひたすら登る。

なだらかな山頂部は、奥行きが深い。北海道の山か、北上山地の山に似て、頂上が霧のためもありはっきりしない。9時半近く、やっと三角点のある山頂に着いた。旧日本軍陸軍省測地部が設置した三角点だろう。「一等三角点」の石柱があった。

早速グループごとに記念撮影をする。けれども山頂を示す看板や標識は無い。だからガイドが事前に用意して持ってきた「三叉山、3492m」と書いた標識板を胸に掲げて撮影して貰う。意地悪くいえば、適



縦走路を行く。この時は、晴れるかも知れないと思った。



霧の中から現れた「嘉明湖避難小屋」。最奥の建物がそれ。

当なところで撮った看板付の写真を、山頂写真と偽ってもわからない。私と連れ合いはその山頂標識板を借りて、記念写真をFさんに撮ってもらった。

相変わらず視界のない笹の原を、今度は嘉明湖に向かって下降した。「嘉明湖」は隕石の衝突でできたという珍しい湖だ。どんどん下っていくと雲が切れて卵形の湖水が見えてきた。湖の周りは低い笹原で囲まれている。ここで三叉山を割愛した人たちと合流した。湖畔へ下る道は踏み跡が乱れてけもの道みたいだった。

私は、湖畔まで降りると登り返すのがきついで湖畔まで行かず、嘉明湖を見下ろす斜面に座って休憩した。他の人たちも、湖畔まで行って歩き回る人や、私のように途中で座って景色を眺める人などいろいろだった。

ガイドの「大柱」がいつの間にか、コンロで生姜湯を沸かし、皆に振る舞った。「大柱」のザックには大きめのポットが覗いていたが、皆に振る舞うためのものだったようだ。頃合い時間で集合すると、未明に出

た向陽山小屋まで、約10kmを戻る。帰路は小雨でほとんど視界がなく、黙々と歩いた。

往路で休んだ「嘉明湖避難小屋」で長めの休みを取り、昼食。私は持参した菓子類を食べた。この場所で、ガイドがラーメンを作ってくれた。しかし、私と連れ合いは食器を持ってこなかったため、食べなかった。これは大いに悔やまれた。連れ合いは歯の具合も悪く、甘いものも食べなかった。相変わらず持ってきたレトルトの芋を大事に食べていた。

休憩後出発。前日と比較すると、格段に荷物が軽いので、長丁場の割には余り疲れはなかった。もう一つはかなりのゆっくりペースだったので、余裕が持てた。速度を上げると高山病が現れることがあるので、意識してゆっくり歩いたのだと思う。

帰路では、向陽山を往復する予定だ。往路では未だ暗かったので、向陽山への分岐は分からなかった。小雨がしょぼつくなかを進むと、向陽山への分岐に着いた。

疲れた人も多かったから、希望者だけで登ることになった。登山地図で調べると分岐から登り35分、下り25分と書いてあった。標高差100mくらいなので、たいしたことはないだろうと判断し、日本組は全員行くことにした。

登山地図は、旅行社に依頼して買ってもらい、台北を出発して直ぐに、バスの中で受け取った。台湾の人で登山地図を持っている人は見なかった。

すでに午後の2時半で、行動してから12時間も経っていた。さすがに疲れたが、もうひと踏ん張りだ。登山隊の半数以上は向陽山には行かず、向陽山小屋へ下山した。

ほんとうに、ひと登りで向陽山に着いてしまった。二等三角点があったが、山頂を示す標識はない。ここでもガイドが用意した「向陽山3604m」の看板を掲げて、記念撮影をした。

予定のコースをとにかく消化したので、満足な心地で山を降りる。下りなので足取りは軽く、山頂割愛組と分かれた分岐点まで、直ぐに着いた。

やがて樹林帯に入ると、先行する向陽山割愛組に追いついてしまった。

全員揃って無事に向陽山小屋へ戻った。まだ暗い2時半から歩き始め、帰り着いたのは16時30分だから、所要14時間だ。私の場合、日本の山で長丁場



三叉山山頂。写真では見えないが足もとに「一等三角点」があった。こんな山頂写真なら、適当な小山で山名板を掲げて撮影すれば、「山頂」になってしまうが…。



隕石の衝突でできたという嘉明湖。「天使の涙」といわれているが、天気不良で今ひとつ映えない。

の時は11時間くらいは歩いた。ただし、それは2～30歳代の無理がきくとき。それ以外でこんなに長く歩いたことはない。ただし、このたびの台湾山行はじれったく思える場面があるほど、かなりゆっくりだったので、余裕は持てた。

小屋に入ると、前夜と同じ寝床でくつろぐ。直ぐに寝られるように畳んであった寝袋を広げた。

じきに夕食となった。献立は前夜と同じようなものだったが、疲れた体には嬉しい。連れ合いは昨日の枯れ枝で作った箸で食べ、私は借り物のフォークで食べた。食事時にビールや酒を飲む人はいなかった。寝床に戻り、借りたフォークのお礼として、Fさんに台湾ビールを進呈した。私も残っている一缶をあけた。飲みながらFさんとすこし四方山話をすると、直ぐに眠くなり意識は徐々に沈没していった。 (続く)

スリランカ・ケラニヤ便り ⑤

日本語を学ぶ学生たち

為我井 輝忠(ケラニヤ大学人文学部現代外国語学科・日本語教師)

ケラニヤ大学で日本語を学んでいる学生は三学年合わせて130人位いる。そのうち97%は女子学生である。スリランカでは高等教育の面で女性の活躍は目覚ましいものがあり、各界での進出が著しい。かつては女性の大統領や首相もいた。ケラニヤ大学構内を歩いていても、女子学生の方が多い。また教えている先生方も女性が多いような気がする。

新学期初めに、2年生には「私の好きな日本の言葉」、1年生には「私の将来の夢」という課題で作文を書いてもらった。そ

の中から興味を覚えた作文を紹介したい。お読みになってどのような感想をお持ちになれるだろうか。それぞれ日本への憧れと日本語を勉強して将来スリランカの後輩たちの役に立ちたいという考えをよくお分かりいただけると思う。2人の文章はほとんど手を加えておらず、原文のままである。スリランカの学生の日本語能力は大変高い。ただし、最近中国語と韓国語を学ぶ学生が増えて、日本語を選ぶ学生が減りつつあるということを知ることが、日本語を教える者として大変残念である。



現代外国語学科の先生方とともに(前列中央が筆者)

私の好きな日本の言葉

アシター・リャナゲ(2年生/女性)

たくさんある私の好きな日本語の中で、ある一つのものについて書くことは少し難しいと思います。どうしてかと言うと、好きなものはたくさんあって、何かを選ぶというと、問題を生み出すからです。ただし、一つのものを選ばなければならない場合、私は、日本語にある一番好きな言葉として「花」という言葉を選ぶことにしました。

ところで、「花」と言う、皆が知っているように美しい植物であり、もし「花」と言うすてきなものがこの世の中になかったら、この世界は今のように美しさのない所になるかも知れません。人間にとって「花」というきれいなものは親しくてどうしても自分の人生とはなれたくない大切なものだと思います。現在でも昔と同じように花に愛された人や花のさまざまな色や形について研究を行った人や花の美しさを歌に詠んだ人たちがいます。これらの理由は何か

と言うと、人間は生まれた時から死ぬときまで、自然に「花」を愛しているからです。

私も「花」は大好きで、どんな「花」でもきれいに見えます。私にとって「花」がたくさん咲いている庭は、世界の中にある一つの天国のようなものです。どんな「花」にも好みを持っている私はスリランカの花はおろか日本の花も大好きです。日本の花の中で、代表的な花として桜をみとめられます。桜の花はずばらしいとくちょうを持っていて、すごくきれいな花だと思います。でも私は桜の花の本当の美しさを見たことがありません。いつか日本へ行って桜の美しい花をじっさいに見て、その美しさを本当に感じたいです。

日本語の場合は「花」と書く時、その漢字も「花」のようにきれいな漢字で出来ているので、その言葉を書くのも私は好きです。

(原文のまま)

私の将来の夢

イシャーラ・ペトゥム・ヌワンシリ (1年生 / 男性)

人によってそれぞれ夢は違います。なぜならそれぞれいろいろな目的があるからです。誰でも小さいころから夢があります。おおぜいの年とった人にも「しょうらい何をするの?」としつもんされました。そのとき私は医者になりたいとへんじしました。どうしてかというと、小さいころ私はよく医者のところへ行っていたからです。

私は小学生の時日本語を習うことをはじめました。それから日本語の興味がだんだん高くなりました。それで中学生のころ日本へ行くチャンスももらいました。2007年に日本へ行きました。色々なすばらしいけいけんをたくさんもらいました。日本人の友達もできました。それで帰国してからいっしょうけんめいに日本語を勉強してAレベル試験に科目として受けました。今日本語を学ぶ大学生になっています。

日本語を勉強する前には日本人に会ったときに話しかえるところかかおがひきつってしまった私ですが、いっしょうけんめいに日本語の勉強を続けたおかげでりかひできるようになったと思います。ホームステイした時には日本の生活や日本の教育システムや科学技術の発点についてもだいたいのちしきを与えることができました。

このようなけいけんによって日本語は私のしょうらいの夢になりました。スリランカの大学を卒業してから日本の大学に入るつもりです。はいってからもっともっと勉強し、はくしかていまで行って日本の文化や文学などの中から一つをせんもんとしてならってからスリランカにもどってスリランカで日本語をべんきょうしてる学生におしえるつもりです。

(原文のまま)

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 69

グラモダヤ民族芸術センター その2

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

手織り布探しの旅の話の前に、このセンターの事をもう少し話しておきましょう。

グラモダヤ民族芸術センターは、コロンボから車で30分ほど東に走った、スリー・ジャヤワルダナブラ・コッテにあります。首都とはいっても主な建物は国会議事堂ぐらいで、現在はグラモダヤ民族芸術センターが2番目の規模の施設と言えます。各行政機関や住宅、公園、ショッピングセンター等が含まれた都市計画はありますが、全く実行に移されていません。

国会議事堂の向かい側には広大な芝生広場があり、平日は人影がまばらで、野良牛や山羊が草を食んでいる姿ばかりが目立ちます。ところが土・日曜日になると何処から湧き出てきたのだろうと思うほど、人が集まりクリケットに興じています。この広場から、国会議事堂の周囲を囲む池沿いに1kmほど

歩くとグラモダヤ民族芸術センターがあります。

どのようにしてスリランカの古い手織りの布の情報を得よう、と考えていた時に思い出したのが、グラモダヤ民族芸術センターでした。駐在員だった時に、ここより少し先に工事現場があって、週に何度もこのセンターの前を通っていました。当時は全く気にも留めていませんでしたが、調べてみるとスリランカに古くからある伝統芸術を若い世代に後継させる事を目的としている事が分かりました。こんな訳でスリランカの古い手織りの布を探す旅のスタートとして、このセンターを訪問することにしました。

特に古い手織りの布でなくても良かったのですが、例の「アジアの手織りの布と染織に関する本」には各国の伝統的な柄の手織りの布が載っていたので、少し意地になって古い手織り布を見つければ伝統的な柄が分るだろうと考えたからです。

さて、センターには着いたものの受付らしき場所が見当たりません。周囲を見回すと事務棟らしき建物がありました。入ってみると何人かの若い職員がいます。あまり外国人の訪問者に慣れていない様子です。古い手織りの布の情報を探している事、その情報を持っている人を紹介してもらえないか、と伝えたいのですが上手く伝わりません。そうこうしているうちに、奥の部屋から年配の男性が現れて話を聞いてくれました。

彼はこのセンターの所長さんで、日本人がスリランカの古い手織りの布の情報を探している事に興味を持った様子です。彼の執務室に招かれて紅茶を飲みながら、なぜ古い手織りの布を探す事になったのか話をしました。スリランカに駐在員として住んでいた事を説明し、事の発端となった「アジアの手織りの布と染織に関する本」を見せて、この本にスリランカの古い手織りの布が載っていないのに驚いたこと、伝統的な柄を知りたくて古い手織りの布を探しに来たことを伝えました。

僕の話聞いた所長さんは、16世紀初めにポルトガルによって始まり、17世紀中頃からオランダ、18世紀末から20世紀中頃まで続いた英国による合計で約450年間に渡る植民地時代に、多くの伝統的な文化が失われたこと、手織りの布もその一つである事を教えてくれたうえ、グラモダヤ民族芸術センターは、そのような失われた伝統的な文化を復活させ、若い世代に引き継ぐために設立されたことを説明してくれました。彼も「アジアの手織りの布と染織に関する本」を見てスリランカの古い手織りの布が載っていない事に驚いていました。

この後、所長さんの案内でセンターの中を見学させてもらいました。スリランカの伝統芸術を学ぶクラスは、11クラスあるという事でしたが、この日に実際に授業を行っていたのは織物、木工、舞踊等の7～8クラスだけで、授業を行っていないクラスでは、授業そのものが行われている形跡がありませんでした。所長さんの話では織物や木工等の卒業後に働き口のあるクラスには生徒が集まるが、レース編み等は製品の需要が少なく、働き口が見つからないクラスには生徒が集まらないのだそうです。

織物クラスでは実際に糸を紡ぐ授業や、機織り機



を使っての授業が行われていました。織物クラスの先生が織り上がったばかりの布を広げて見せてくれました。(写真1) 柄が伝統的な物かは定かではありませんが、この出来栄えならば「アジアの手織りの布と染織に関する本」に載せても、他の国の物と比べても遜色ないと思われます。

木工クラスでは釘を使わないで家具を作る実習が行われており、ノミ等を使って木材を加工し、組み立てを行っていました(写真2)。舞踊クラスは生徒数が一番多くて賑やかでした。楽器クラスの生徒と合同でキャンディダンスを踊ってくれましたが、生徒がレオタード姿なので、恥ずかしがるという理由で撮影を禁止されたのが残念です。僕から見れば、キャンディダンスの衣装の方が露出度は高いと思うのですが、所変われば何とやら、ですかね。

織物クラスの先生からキャンディとアヌラダプラ、クルネガラを結ぶ三角地帯に古い手織り布が残っている可能性が高いという話を聞きました。次はそこに行ってみます。考えてみると、この三角地帯はシンハラ王朝遷都の軌跡そのものです。(続く)

〈2013 あさおサークル祭〉

2013年6月1日(土)・2日(日) 場所：麻生市民館視聴覚室&大会議室

6月1日と2日、川崎市麻生市民館利用団体が実行委員会を結成し、「2013あさおサークル祭」が開催された。

‘わんりい’は、6月1日(土)、大会議室で山下孝之さんのケーナ演奏会、6月1日(土)・2日(日)の両日は視聴覚室で、‘わんりい’のお宝である京劇ビデオ鑑賞会で参加した。

【アンデスの民族楽器・ケーナ演奏】

大会議室 14:30～15:30

あさおサークル祭では、長年、恒例として万馬馬頭琴アンサンブルが馬頭琴演奏で参加してきたが、今年は、「コンドルは飛んで行く」でよく知られているアンデスの民族楽器・ケーナ演奏で参加した。演奏者は、近年‘わんりい’活動で関わり深くなっている山下孝之さんで、ご自分のケーナ教室の生徒さん6人を引き連れて参加くださった。



山下孝之さんのケーナの音色は、何時もながら心に沁みてなんとも心地よい。ケーナは南米発祥の楽器だが、山下さんは日本の竹からご自分でケーナを作成し演奏され、その為か山下さんが演奏するケーナの音色は日本人の琴線に触れるものがあり、特にオリジナル曲は心が広がって、気持ちが洗われるようだ。

お弟子さん6人の演奏も、ケーナを始めてから、長い方で2年、短い方は2、3ヶ月とのことだったが、山下さんのギター伴奏でとても楽しい演奏だった。

ケーナは、それぞれのケーナで微妙に音色が異なるようで、6本での合奏によって音色に深みや力強さが加わった。今年は、初めてのケーナ演奏による参加だったが80人近い方々の参加があり盛会だった。

【‘わんりい’お宝ビデオ上映会】その①

日本留学の京劇俳優たちの熱演・第2回京劇鑑賞会
視聴覚室 10:00～12:00

6月1日上映のお宝ビデオは、‘わんりい’活動開始半年後の20年前に、麻生市民館大ホールで主催した「第2回京劇鑑賞会」(1993年)のビデオで、今も日本で京劇俳優として活躍している張紹成さん、殷秋瑞さんが、来日間もない頃の若々しい演技を披露する貴

重なものだ。

出演者を昔から知っている方々は、「そう、若いときはこんなだったのよね」と懐かしく思い出していた。



演目は、「白蛇伝」、「水滸伝」等から題材を採ったものや宋代の軍記物に題材を採った「挑滑車」等、いわば京劇18番とでもいうような、京劇ファンならずとも解り易いもので、ビデオの中で、日頃、素顔で接している俳優さん達が、若さ溢れる迫力の演技を披露していた。当時小田急沿線を放映エリアにしていた小田急ケーブルテレビが大型ビデオ3台で撮影した画像は大きなスクリーンでの上映でも鮮明な画像で、迫力満点の京劇の立ち回りの面白さを堪能出来た。

【‘わんりい’お宝ビデオ上映会】その②

京劇界重鎮・王金璐主演による「長坂坡」
視聴覚室 10:00～12:00

6月2日に上映の京劇ビデオ「長坂坡」は、‘わんりい’お宝ビデオ中のお宝というべきもので、三国志の若き英雄・趙雲を演じているのは、中国京劇界で人間国宝と目される重鎮、王金璐氏である。1995年に氏を招へいた当時、74歳の高齢だったが、舞台での大立ち回りにはそんな年齢を感じさせない。

氏が、‘わんりい’の招請に応じてくださったのは、当時から‘わんりい’と親しい関係にあった京劇俳優・張紹成さんが、先生のお弟子さんだったからで、当時はまだ、中国との往来が自由ではなく、‘わんりい’のメンバーたちは関係方面に八方手を尽くし、氏の来日を実現させたのだそうだ。

ビデオの中での氏の迫力の立回りや役になりきった眼力に「生の舞台を見たかった」という気持ちがふつつつ湧いて来た。

今回のビデオ上映は好評で、2日間で、延べ50人近い参加があった。本来は内輪の催しの積りだったが、京劇は初めてという参加者もあり、上映ビデオに関する資料を用意すべきだったと反省している。また、長く眠らせたままであったが、孫悟空だけではない京劇の面白さ素晴らしさを知って貰う機会として、改めて再上映を考えたいと思っている。

20周年記念事業に向けて ‘わんりい’の活動を振り返る

‘わんりい’の活動が正式に始まったのは1992年の9月からです。ですから正式には、昨年の9月で20周年を迎えています。諸事情で記念事業を遅らせていたところ、‘わんりい’の活動を通して懇意な林敏さんが今年に来日音楽活動20周年という節目の年と伺い、では、合同で記念事業をしましょうと、トントントンと話が進みました。

鶴川地域住民が長年渴望していた、市民の鶴川地区活動拠点・「和光大学ポプリホール・鶴川」が昨年10月に竣工成り、折よく、今年年頭より一般使用が可能になりました。これまで世界各地で演奏を続けて来られた、いわばグローバルな視野の下で音楽活動をされていらっしゃる林敏さんと組んで、この鶴川の新しい文化的シンボルともいえるホールで20周年記念事業を開催できることはこの上ない喜びを感じます。

さて、‘わんりい’が活動を始めた1900年代前半は丁度、日本の経済がかつてない程に急成長して好景気に沸いており、その好景気を当て込んだ諸外国の人たちが日本各地にどっと増えた頃でした。一方、中国からも80年代の末の天安門事件以来、多数の中国の若い世代が、自分の未来を探しに来日するようになりました。私たち日本人の視野が世界に向けて大きく広がった時代だったかと思います。

とはいえ、私たち日本人は周囲を海に囲まれた国で生まれ育ち、外国の存在をさほど意識しないで生活してきました。急激に増えた外国の方たちにどんな風に向き合って、どう付き合えばよいのか、暗中模索した時代でもありました。日本人ばかりでなく、当時来日された外国の皆さんも、そのような日本人に対して、きっと日本人と同じような戸惑いを持たれていたのではないのでしょうか。そんな世相の中で1992年夏、中国語と気功・太極拳講座を開始する話し合いの中で、「講座だけではなく、外国の方たちとも知り合えるような活動も始めよう」という提案が出されました。

中国国立戯曲学院第一期卒業の若い京劇の俳優さんを中国語講座と気功・太極拳講座の講師に迎えたことで、京劇鑑賞会、京劇鑑賞講座、「京劇を楽しむ

会」などが定期的に行われるようになりました。続いて、京劇の音楽担当の中国民族音楽の方たちとのかわりもできて民族音楽演奏会や民族楽器の講座、更に、中国人作家の展覧会や写真展など当初は中国文化を知る活動中心に回を重ねるようになりました。

‘わんりい’の会が幸運だったことは、芸術家として研鑽をつまみ、優れた人間性と品格を備えた、中国の素晴らしい人たちとの出会いが活動開始の最初から多数あったということだと思います。そして、‘わんりい’の活動を通して出会った方々との付き合いは以来途切れることなく続いて、いまだ力を頂いている事を、20周年を超えた今、改めて感じると共に深い感謝の気持ちを新たにしています。

一方、活動開始以来、常に好奇心の強い会のメンバー達やサポーターの皆さんに支えられ、「文化はみんな違って、みんないい」を合言葉に、中国だけにこだわらずアジアから来日の外国の方たちとの協力によって、手づくりのボランティア活動としていろいろな国の文化に親しんで楽しんで来ました。京劇を知ることから始まった活動でしたが、その後中国の民間芸術やアジア諸国の料理に興味の範囲を広げて20年を超えました。

そして様々な活動経験から深く感じるのは、どの国の文化も“国や民族を超えた人間”が作り上げてきたということです。喜び、悲しみ、嘆き、感動し、愛し、祈る人の心は万国共通だからこそ、文化は万里を超えて伝わって行くのだと思います。各々の国の文化は、ちょっと見には違っているように見えてもその深いところで人間同士という太い絆で結ばれているので、ともに人間同士として深く共感しあえるのでしょう。だからこそ「文化は違ってみんないい」のだと思います。

最後に一言ですが冒頭にも書きましたように、林敏さんの演奏活動、そして演奏内容は、洋の東西を超えた世界的な広がりがあります。まさに‘わんりい’の20周年記念に相応しく、きっと参加された皆様の心を掴むと共に万里に繋がる文化の素晴らしさ感じて頂けると確信しています。

お誘い合わせてご参加くださり、林敏さんの在日音楽活動20周年と‘わんりい’活動20周年を祝って頂ければ幸いです。(2013年6月)

‘わんりい’代表：田井光枝

サハ共和国・ヤクーツクだより ③

杉嶋俊夫

私のヤクーツクでの滞在ものこり2週間。現地からの「タイムリーな」たよりは、これで最後となります。今回は、ヤクーツクと日本の交流と、それを支える柱ともいべき日本語教育についてお話しします。

■ 日本語を学ぶ若者たち

ヤクーツク市内にある北東連邦大学では約50名の学生が日本語を学んでいます。教師はサハ人4名、日本人1名。学内スピーチコンテストにはほぼ全員の学生が出場し、優勝者はロシア極東地域大会に、そこで勝ち残ればCIS諸国大会に出られます。

なんと昨年のCIS大会では北東連邦大学の学生が1位になりました。本学は、以前は日本とのつながりが弱かったのですが、ここ数年の間に3つの日本の大学と協定を結び、4つ目の協定の話も浮上しています。現在、4名が日本に留学中です。

■ 日本語教育、サハと日本をつなぐ架け橋

あまり知られていないのですが、世界で最初に日本語教育を始めたのはロシアでした。そのロシアで2番目の日本語学校がヤクーツクに作られました。18世紀中頃のことでした。その学校は閉鎖されましたが、ソ連が崩壊してロシア連邦に変わる頃、ヤクーツク国立大(現 北東連邦大)で日本語教育が復活しました。ヤクーツク市内には日本語の授業が行われている学校もあり、日本語は学んでいないが日本に関心を持つ若者も、大勢います。

■ “近くなりつつある国”、サハ

サハ共和国を訪れる日本人は多いとは言えませんが、サハの人々は日本をアジアの遠い国だとは思っていません。ヤクーツク市内を見ても、自動車の多くは日本車で、日本料理店が5軒あり(味のほうはだいぶアレンジされていますが・・・)、海苔、醤油、だしなどはあちこちの食料品店で売られています。最近、実験的に、サハと日本を結ぶ直行便が飛びました。

搭乗時間は長いですが数年前の2分の1に近い値段でサハに行けるルートもできたようです。将来、サ

ハと日本の若者の交流が本格的に始まったら、きっと他の地域には真似のできない面白いことが色々できるでしょう。それまでに一度またヤクーツクを訪れてみたいのですが、いつになることでしょうか・・・。



1年生の日本語劇。ラストは「幸せなら手をたたこう」で明るく終わりました。1年生は見事なアニメキャラクターの絵を描く学生、歌唱力抜群の学生などユニークな人材が豊富・・・。2年生とともに、来年度(今年9月)のさらなる活躍が期待されます。



3年生による着付けのデモンストレーション。(ヤクーツク市立図書館のイベント「バーチャル日本旅行」にて)ロシア語で見事に着付けのしかたを説明していました。このイベントで、ソ連時代から日本に関心を持つ方々が、大勢いらっしゃることを知りました。



日本語クラスの学生たちがフェアウェル・パーティーを開いてくれました。この写真に映っているのは4年生(写真中央が杉嶋)。「世界一仲がいい」と言いたくなるほど心優しい、ほのぼのとしたクラスでした。ちなみに、ロシアの大学は5年制で、今、4年制に移行しつつあります。



ヤクーツク福岡間を、実験的に初めて直行便が飛びました。写真は、4月中旬に市内で見かけた搭乗希望者募集の看板。ヤクーツク成田間の直行便が誕生するのはいつでしょうか。

杉嶋俊夫 略歴：東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。

《'わんりい' 掲示板》

◆わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

よく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう！正しい発音で読めるように練習しよう！漢詩の時代的背景や詩に描かれている情景を知って漢詩を一層楽しもう！

- ▲場所：まちだ中央公民館
- ▲月日：7月の講座 7月7日(日)6F 学習室3・4
8月の講座はお休みです。
- ▲時間：10:00～11:30
- ▲講師：植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：20名(原則として)



* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

【7月の定例会と9月号のおたより発送日】

- ◆定例会：7月8日(月)時間・場所はお問合せ下さい。
- ◆9月号のおたより発行日：8月31日(月)
三輪センター 午前・午後 印刷と発送準備

◆わんりいの催し

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう！

- ◆動きやすい服装でご参加ください
- ▲場所：まちだ中央公民館・6F視聴覚室
- ▲月日：7月20日(火)・8月20日(火)
- ▲時間：10:00～11:30
- ▲7月の練習歌「川の流れるように」
8月の練習歌「花は咲く」①
- ▲講師：Emme(歌手)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：15名(原則として)



●申込み：わんりい ☎042-734-5100
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

◆まちだ中央公民館への行き方：小田急線南口・横浜線ルミネ口徒歩5分、町田市原町田6丁目8-1町田センタービル109 6F

林敏 揚琴 (ようきん) リサイタル・万里の絆

日中文化交流市民サークル・わんりい 20周年記念と林敏来日音楽活動 20周年記念として共催で開催します。

【出演】萩森英明(ピアノ・音楽監督) 樋口泰世(チェロ・東京交響楽団所属) 安田修平(コントラバス・東京交響楽団所属)

【予定プログラム】

♪ 月の光(ドビュッシー) / ♪ 交響詩我が祖国よりモルダウ(スメタナ) / ♪ カンツォネッタ(チャイコフスキー) ♪ カルメン幻想曲(ビゼー作曲ワックスマン編曲) / ♪ 平湖秋月(中国伝統音楽) / ♪ 陽光がタジクルカンを照らす(陳剛) / ♪ コスモス(さだまさし) / ♪ 水色のワルツ(高木東六) など他

◆ 2013年9月20日(金) 19:00開演(開場:18:30)

◆ 和光大学ポプリホール 鶴川

<http://www.m-shimin-hall.jp/tsurukawa/>
(小田急線・鶴川駅下車北口3分 *駐車場はありません)

◆ 4000円(前売り3500円)

◆ お問い合わせ: ☎042-734-5100 (わんりい)

※チケットは小田急線町田駅前久美堂本店2Fでも扱っています。



145本の弦が華やかな音色を奏でる中国民族楽器・揚琴



東京中国文化センターの催し

自由な呼吸—中国当代芸術名家東京展

<http://jp.jnocnews.jp/news/show.aspx?id=52742>

油絵・写真・自然素材作品等、中国の現代アーティスト17名(予定)による作品展

出品予定作家:

孫国娟/喻伝紅/王文/徐晨陽/梁必軒/沈敬東/王五龍
陳慶慶/尹宇寧/馬台友/曹小冬/陳亜峰/王軼琮/馮峰
張方白/邱天/李昌龍

● 会期: 2013年7月2日(火)~5日(金)

10:30~17:30

*但し初日は15:30開場、最終日15:00迄 会期中無休

● 入場料: 無料

● 会場: 東京中国文化センター

(日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩約5分
/ 銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩約7分
/ 港区虎ノ門 3-5-1 37森ビル1F / ☎: 03-6402-8168)

◆ 主催: 東京中国文化センター



町田国際交流センターの催し

【懇談会】平和な国フィンランド-寒冷地に生きる

「ムーミン」を生み出した森と湖の国・フィンランドを知ろう!

● 7月28日(日) 14:00~16:00 (開場 13:30)

● 町田市民フォーラム4階 第2学習室 A&B

● 参加費: 無料

● 申し込み: 「国際理解懇談会(フィンランド)申し込み」として: 住所・氏名・参加人数と電話番号をご記入し、FAX 番号: 042-722-5330 (町田国際交流センター) へ送信下さい。締め切り: 2013年7月19日(金)

※受付確認の通知はありません。

◆ 主催: 町田国際交流センター (担当: 国際理解部会)

‘わんりい’ 185号の主な目次

北京雑感(76)北京のタクシー「赤い夏利」	2
諺・慣用句(21)「盗人に追い銭」	3
媛媛讲故事(55)「花好き翁V」	4
【智子の雑記帳】(94)「五月病」その後	6
中国-城市めぐり(26)「南京市」	7
日本探検記(4)ハネト初体験	10
中国の笑い話 X	11
台湾登山ツアー体験(4) 一番長い日	12
スリランカ・ケラニアだより(5)	15
スリランカ紹介(69)「民族芸術センター その2」	16
‘わんりい’ 活動報告『あさおサークル祭』	18
‘わんりい’ 活動20周年記念について	19
サハ共和国・ヤクーツクだより(3)	20
‘わんりい’ 掲示板	21・22

‘わんりい’は、毎年4月から新年度になりますが、年度間の新入会をいつでも歓迎します。

年会費: 1500円 入会金なし

郵便局振替口座: 0180-5-134011 ‘わんりい’
途中入会は会費の割引があります。お問い合わせください。

入会されると

①年10回おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ: 042-734-5100 (事務局)

◆ インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。